

第 31回全国研究集会／分科会の内容と活動報告の募集

新建第 31回全国研究集会では 12の分科会に分かれて、全国の建築まちづくり活動を集約し、自由闊達な意見交換で問題意識や認識を深めていきます。現在、分科会での活動報告を募集しています。あなたも、日々実践している活動、あるいは世の中に対する提案などを報告してください。

■分科会A 11月 17日（土） 14:00～ 18:00

第1分科会 建築まちづくり政策の構築

担当者：鎌田一夫（sumaiken@sky.plala.or.jp）、石原隆行

人口減少や高齢化が進む社会に対応すると称して、建築まちづくり分野でも新たな政策や法改正が進められています。しかし、国家戦略特区が象徴するように、規制緩和による経済活性化で解決を図る旧態然とした施策であり、建築まちづくりの現実課題（住まいの貧困の拡大、建築法制度と行政の疲弊、不動産金融の暴走、合理化で加速する地域縮退、等）に全く応えていません。政策の構築というとは如何にも難しそうですが、現実と向き合っている私たちこそ、次代の政策の展望が出来るのではないのでしょうか。日常の活動や仕事で感じている矛盾と解決展望を、政策的な視点でまとめて報告下さい。それらを積分して 50周年の政策提言に結びつけたい。

第2分科会 防災と復興

担当者：新井隆夫（takaoops@icloud.com）、三浦史郎、山下千佳

日本列島は1995年の阪神淡路大震災以来、新潟中越、東日本大震災、熊本地震など、私たちの記憶にあるだけでもこの20数年来毎年のように大きな地震がおきています。また集中豪雨による洪水、大規模な土砂崩れなどにみまわれております。そして原発災害に象徴されるように、災害からの生活再建をさらに困難にしているのは、人間が作り上げてきた、過密都市、自然破壊による宅地造成などであることは明白です。いったん災害が起きるといかに困難な状況を生んでいるか、この数年間いやというほど味わってきました。災害列島に住み、とりわけ建築とまちづくりにかかわる専門家として、「防災、減災、そして被災地支援」について真剣に考え意見交換したいと思います。多くの皆様の参加を呼びかけます。

第3分科会 環境とデザイン

担当者：永井幸（n-space@n03.itscom.net）、伊田直樹、加瀬澤文芳

南北に長い日本列島では、地域によって気候が大変異なります。地域独自の、暮らし方の工夫や知恵が住まいのありように係わってきました。皆さんは住宅のデザインや仕様（性能）を、施主とどんなふうに話をされていますか。省エネの追求だけでなく、住む人の感覚に合った、気持ちのよい住宅をどう追求するか。皆さんが実践されている、最善の温熱環境スペックを紹介していただきたいと思います。技術論、間近に迫る2020年の「省エネ基準の義務化」への対応や、深刻な地球温暖化による気候変動など、身近な問題から大きな問題まで、報告を足掛かりに、活発な議論をしましょう。多くの事例報告と当分科会への積極的な参加をお願いします。

第4分科会 子どもの発達と環境

担当者：川本真澄（kawamoto@moegi-archi.com）、高田桂子

これまでは、主に保育園を取り巻く環境と設計のありようをテーマにしてきましたが、今回はもう少しテーマや対象を広げたいと思います。現状に目をやれば、保育園では、待機児童解消を優先する民営化が進み、園庭や採光の緩和など環境軽視の方向にあります。国の保育指針による幼児教育の押し付けも問題になっています。学童保育は設置基準もなく数も不足しています。小中学校では統廃合が進み、身近な地域の中で育ち合う環境が失なわれつつあります。子どもの豊かな発達を保障する環境とは何なのか、各地からレポートや取り組みを持ち寄り、話し合いたいと思います。

第5分科会 集まって住む様々なかたち

担当者：久永雅敏（hisanaga@moegi-archi.com）、杉山昇

このところ家族関係の変化には大きなものがあり、少子化・超高齢化・単身化などが身近になってきました。戸建て住宅地でも、親が超高齢・単身となると独立して出ていった息子が介護に帰ってきている、ある賃貸の団地では、孤独死して 3年後に白骨遺体で発見されたなど、これまでには一般的ではなかったことが、他人ごとではなくなってきています。コーポラティブハウス、シェアハウス、グループリビングなどにより、集まって住むことに意義を感じて取り組んできている皆さんの暮らしの実態について情報交換し、お互いに今後の取り組みの参考にしましょう。時代の変化を踏まえて、本当に集まって住む効果を確認するために。

第6分科会 地域の建築力を高める

担当者：栗山立己（info@hds-plus.com）、柳澤泰博

地域工務店は、伝統に裏付けられた工法を長年育まれた技術と技能を駆使して、良質な日本の住宅をつくり守ってきました。ところが近年、建物に求められる性能・機能が著しく多様化・高度化し、技術力そのものもさることながら、契約や法的な手続きも複雑で手間がかかり、生産規模が小さく人員が少ない工務店には大きな負担となり、情報力や宣伝力でも不利な地域工務店にとって、本来の力を出し切れない状況につながっています。また、地域の設計者にとっても厳しい環境は同様で、省エネ・耐震など多岐にわたる細密な専門知識が要求され、一方で構造材のプレカット化、建材のアッセンブル化が急速に進み、従来の木造住宅をしっかりと設計できる若手技術者が減ってきています。こうした状況の中、地域で生き抜く工務店と設計者のこれからを探ります。

*報告文は写真や図面も含めて原則としてA 4版で 2枚又は 4枚でまとめてください。

*応募報告は研究会当日に発表できなくても資料集に掲載して記録とします。

*既発表報告の全面コピーは避けてください。 *締め切りは 10月 10日です。

報告文のフォーマットなど具体的な応募方法及び提出については下記までお問合わせください。

全国研究集会担当常幹加瀬澤文芳mail:office@yumaku-kan.co.jp 携帯電話 090-9681-8304

■分科会B 11月 18日（日） 9:00～ 13:00

第7分科会 まちづくりの実践

担当者：桜井郁子（sakubo@mbe.ocn.ne.jp）、伴年晶

新建が研究集会を始めた当初から取り組んできたまちづくり分科会。経済政策や規制緩和などにゆがめられ、住民を苦しめるようなまち壊しに対し、住民と共に取り組んできた反対運動が数多く報告されてきました。合わせて大規模開発への住民による対案づくりや共同建替、地域や学生とともに反対運動だけでない流れをつくるしなやかさなど、「住民派のまちづくり」の実践も進んできました。しかし今でもまち壊しがなくなっていません。かえって巧妙に練り上げられた仕組みや行政の不備や悪弊などにより、以前よりも深く広く深刻な状況かも知れません。今あらためて全国各地で粘り強く続けられている実践を共有し、各地での仕事や活動のヒントに繋がりたいと思います。

第8分科会 リフォーム・リノベーション

担当者：岡田昭人（okada@smdw.jp）、吉田剛

近年、各地で既存の建築ストックの改修・利活用が盛んです。こうした取組みは「リノベーション」と呼ばれ、SNSなどで活発に発信されています。たとえば空き家・空き店舗をシェアハウスや地域拠点、カフェなどにしている事例は枚挙にいとまがありません。また地方創生の取り組みの一環として、廃止された学校を地域の拠点とし住民が活用する動きもその一つです。本分科会では「リノベーション」をめぐる住宅建設の変化への対応や公共施設などの既存ストックの再生、市民によるセルフビルドの動き、長寿命化技術の開発など様々な課題の議論とともに、建築家技術者として「リノベーション」にどう向き合うのか、全国の実践報告をもとに考えます。

第9分科会 次世代に引き継ぐマンションづくり

担当者：大槻博司（sdfp@d5.dion.ne.jp）、千代崎一夫、大橋周二

全国に分譲マンションの総戸数は約 644万戸（2017年末）でそのうち約6%の空き家あると推定されています。戸建て住宅のように大きな社会問題にはなっていませんが、築40年超のマンションでは1割超の空き家があるとされる一方で毎年10万戸前後が新築されています。これからの管理組合は建物の維持管理だけではなく、「空き家をつくらない」「次世代に引き継ぐマンションづくり」をマネジメントすることが重要な役割になってきます。この分科会ではそのための様々な取り組み～リノベーション、コミュニティ、長期修繕計画、住教育などの報告を通じて、マンションの持続可能性について議論します。

第10分科会 地域に根ざす生活施設

担当者：星厚裕（hoshi@art-gr.co.jp）、今村彰宏

老人、障害者の地域施設として、特別養護老人ホームや障害者の生活施設など大型の施設整備は行われなくなってきています。それに代わって、「地域で暮らす」ことを謳ってグループホームや自宅居住の方向に進んでいます。制度も総合支援法に変わり、地域で暮らす老人や障害者の生活は大きく変わろうとしています。グループホームの新設や改修、自宅の新築や改修など、様々な形で全国の新建会員が関わって実践されていると思います。改修については補助制度などもあり、また地域性もあることと思います、実践の中でのいろいろな問題その対処の仕方など経験を報告しあって確認し、今後の実践に役立てていける分科会に是非報告と参加を呼び掛けます。

第11分科会 民家再生及び伝統技術の継承

担当者：片井克美（katai@gray.plala.or.jp）、渡邊有佳子

民家再生の現場で古材と向き合っていると、作り手の息づかいが聞こえてきます。そこに言葉はありませんが、モノづくりの考え方や構造の工夫、環境との共存方法など、現場から伝わるものが確かにあります。そしてそれらは地域ごとに受け継がれています。しかし一方で、家族構成・生活スタイルの変化への対応、店舗などへの用途変更、耐震・防火・省エネなどの性能確保等、現代の新たな要望にも耳を傾けなければいけません。新しい技術や快適性を求めながら伝統技術を継承するためには、どのような手法があるのでしょうか。様々な視点から各地の実践を共有し、意見交換し議論を深めたいと思います。

第12分科会 住む人によりそう住まいづくり

担当者：大西智子（sgnori444@ybb.ne.jp）、赤澤輝彦

「住まい」は住み手の為のものですが、住み手の在り方は時代と共に変化しています。また、住まいは住み手とともに創るのものだと思うけれど、近年、家は見た目が気に入ったものを買う、という風潮も益々増えているような気がします。一方、住まいをつくる際に住み手の見えない要求をも引き出し最良の空間を提供したい、という創り手の思いは如何なる時代も変わる事は無いでしょう。そして、住まいという社会の最小単位の空間を豊かにする事によって、社会そのものも豊かになるのではないのでしょうか。今の時代、どのようにして豊かな住まいを提供し得るのか、皆さんと共に考えたいと思います。